

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第4回 まつもと りょうざん 松本良山

松本良山という人

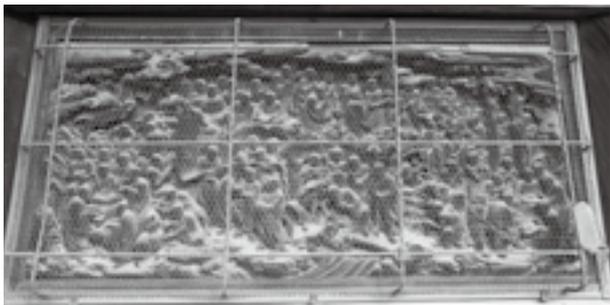
松本良山は、享和元(1801)年に生まれ、本名は金兵衛といわれている。当時、船橋出身の松本三五郎という漁師がいたが、江戸神田に出て、仏具商を営むようになった。家業は順調に進んでいったが子どもがなく、金兵衛を養子にもらうことになった。

金兵衛が13歳となった文化10(1813)年の春に、三五郎夫婦の間に男の子が生まれ、弁次郎と名づけられた。弁次郎が生まれると、平和な三五郎一家に異変が起こった。

同年3月半ば、遊びに出た金兵衛は夕方になっても帰宅せず、隣近所の者が周辺を探したが何の手がかりもなく、一家は悲嘆にくれた。

その頃、金兵衛は、日本橋から伊勢参りや上方に行く人々に現地状況を聞き、自分も仏師になりたいと願い、その一隊に交わり京都へと向かっていた。

京都に着くと四条寺町に14代も名人ばかり続いたという山本茂祐に弟子入りし、10年間、辛苦に耐え修業を続けた。た



上/五百羅漢の一部
下/成田山新勝寺 釈迦堂



享和元年～明治5年(1801～1872)

享和元年に生まれ本名は金兵衛といわれている。仏師。京都で10年間仏師の修業を積み、その後、江戸で板彫りの名人に弟子入りした。京都で学んだことに加えて、彫りの深い立体的な技法を用いた良山の作品は、江戸でもその評判を高めていった。嘉永6年から、江戸の絵師・狩野一信の下絵を基に、当時の成田山新勝寺本堂の堂羽目に五百羅漢を彫った。

また、師匠が病気の折、金兵衛が注文の品を代作したところ、得意先から大変褒められた。そこで、日頃の精進を認めていた師匠は金兵衛に“良山”の号を与えた。

修業を積んだ良山は23歳の春、江戸へ帰り、しばらく父の家でいた。その後、江戸本所(現在の東京都墨田区)に住んでいた板彫り名人・後藤弥太郎の弟子となった。板彫りの研究に余念なく励んだ良山の作品は、江戸でも評判となった。

一世一代の仕事が持ち込まれる

嘉永6(1853)年、江戸の有名な絵師・狩野一信により、一世一代の仕事が持ち込まれた。それは、成田山新勝寺の本堂(現在の釈迦堂)を造営するに際し、堂羽目に五百羅漢の下絵を一信が書き良山が彫刻するというものであった。良山は、一度は辞退したものの、またとない仕事と引き受けることにした。同年11月、良山は妻そめと弟子3人を連れて、成田山へ向かった。この日から、良山は自分の全てを五百羅漢に注いだ。しかし、長期にわたり根気と才能が必要とされる作業、時に意見が対立し、一信と良山の間にも衝突が起こった。仕事に行き詰まり、江戸へ帰ろうとしたこともあったが、ついに、五百羅漢を完成させた。

この仕事を通して多くの称賛を得た良山は、仏師として最高の地位「^{ほっきょう}法橋」に叙せられた。その後、不動金兵衛と呼ばれた良山は波乱に富む人生を送り、明治5(1872)年8月、72歳で生涯を閉じた。

参考資料：『成田史談』31号「仏師松本良山」(石橋徳也)

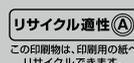
編集後記

取材中に苦戦するのが、赤ちゃんの撮影です。初対面の撮影スタッフに簡単に笑顔を見せてくれるわけではなく、カメラを前にぐずってしまうこともしばしば。限られた取材時間の中、「笑って」と言葉をお願いすることもできず、必死にあやして何とか笑顔を引き出した頃にはこちらはぐったり、なんていうことも。今回の表紙で、赤ちゃんたちが次々とくつろいだ表情になる様子は、私にとっても夢のような光景で、幸せな気分になりました。

平成29年10月15日号 No.1349

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。